



〒892-0841 鹿兒島市照国町13-42 カトリック鹿兒島司教区 電話099 (226) 5100 振込口座 02030-2-8359 編集発行 教区広報部 1部60円年間千共1100円



聖年に寄せて(2)

律法と福音

鹿児島教区司教 中野 裕明

教区の皆さま、お元気でしようか。今回は四旬節中に黙想してほしいテーマについてお話しします。それは「律法と福音」です。

このテーマは「旧約と新約」と言い換えてもいいです。すなわち、イエスの死と復活の出来事は、律法が支配していたユダヤ教の世界に、福音が支配する世界が現出したことを指します。

さらに言うなら「地上の国の現実に、神の国の建設が始められた」とも言えます。

ユダヤ教の核心としての律法

ユダヤ人として生まれたイエスは、成人になるまで、律法を忠実に遵守してきました。ところが、宣教師生活を始めるや否や、ユダヤ教の指導者たちと律法の解釈について論争を始めます。(マタイ5・17、48参照)

ユダヤ教にとって律法とは、モーセを通して神から与えられた教えで、日常生活全般にわたる規程です。彼らはこれらの規程を厳格に守れば守るほど、神のご加護があると信じていま

た。そんな中、イエスは600以上の細則が盛り込まれた律法の規程に対して、それらの存在は許容するが、果たして、それらは律法の付与者である神の意図に沿ったものであるかどうかを問いたかったのでした。

「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない」(マルコ2・27)などのイエスの主張はことごとく当時の宗教指導者のプライドを傷つけ、ついには、彼らをイエス殺害の計画へとかり立て、彼らはそれを実行に移していきました。

イエスの律法の理解

イエスは、律法の解釈について、宗教指導者たちに対して攻撃ばかりしていたわけではなく、正統な議論もしています。

「律法の中で何が一番大切な教えか」という質問に対し、「それは第1に神への愛、2番目が隣人への愛である」と答えています。

(マタイ22・34、マルコ12・28、ルカ10・25参照) また、次のような箇所もあります。



教区の基礎づくりに尽力した

ドミニコ 田原 章神父帰天

鹿児島教区の基礎づくりに尽力してくれた教区司教ドミニコ田原章神父が2月11日(火)午前5時45分、引退後に入居していた高齢者住宅(鹿児島市上荒田町)の自室で老衰のため帰天した。98歳だった。

1927年1月3日に田原神父は、長崎県の五島列島福江島の玉之浦町に田原要次郎・チヨさんの長男として誕生した。地元の小中学校2年のときに司祭への召命にこたえて長崎の小神学校に入学し、その後、当時の仮りに設置されていた大神学校を経て、1947年には開校したばかりの福岡聖ルピス大神学校へと進んだ。司祭の聖位にあげられたのは、1953年3月17日のこと。病気のため同期入学者から遅れること2年で、浄水通教会(福

岡)でのこととなった。その後、すぐに鹿児島教区に派遣された田原神父は、教区長館付となり、その後、指宿教会(1954年)、鴨池教会(1956年)、名瀬聖心教会(1972年)で主任司祭を務めた。1976年からは司教館付となって事務局長を務めたほか、1977年から系永真一司教の総代理となった。その後は垂水教会(1983年)、紫原教会(1988年)、鴨池教会(1993年)、垂水教会(2003年)で主任司祭として働き、2008年(81歳)で引退した。田原神父は主任司祭として働く傍ら、幼稚園の園長、理事長としても手腕を発揮したほか、鹿児島教区

それを実行する人間の側に問題があることを分かっていたのでした。

律法の裁決による十字架によるイエスの死

「律法学者たちやファリサイ派の人々は、モーセの座に着いている。だから、彼らが言うことは、すべて行い、また守りなさい。しかし、彼らの行いは、見做ってはならない。言うだけで、実行しないからである。」(マタイ23・2、3)

イエスにとつて、律法は神の意思の表れであり正しいものですが、如何せん、

宗教指導者たちによるイエスの裁判は「自分を神の子だ」と自称したことが、神への冒とく罪に当たるとの裁決で、死刑が宣告されました。つまり、イエスは律法によって裁かれたのでした。

律法は神の意思の表現。それによると、神は唯一です。ですから、イエスが自分を神の子と自称することは、

当然、律法の掟に反することです。従ってその判断自体は間違っていないと言えます。しかし、ローマ総督ピラトは「この男は死刑に当たるとは何かは何もしていない。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう」(ルカ23・15、16)と無罪を認めながら、自分の名誉のために世論に負けて、死刑を許可しました。

イエスの復活による「ゆるし」の実現

イエスの復活の第1の効果は、「罪のゆるし」です。(ヨハネ20・19、23参照)

聖霊のわざとして弟子たちに与えられたゆるしの権能とその効果が「福音」として、新しい神の民を形成するようになったのです。もちろん、この罪の赦しは、人祖の罪(原罪)と自分の責任で犯す罪(自罪)を指しています。

岡)でのこととなった。その後、すぐに鹿児島教区に派遣された田原神父は、教区長館付となり、その後、指宿教会(1954年)、鴨池教会(1956年)、名瀬聖心教会(1972年)で主任司祭を務めた。1976年からは司教館付となって事務局長を務めたほか、1977年から系永真一司教の総代理となった。その後は垂水教会(1983年)、紫原教会(1988年)、鴨池教会(1993年)、垂水教会(2003年)で主任司祭として働き、2008年(81歳)で引退した。田原神父は主任司祭として働く傍ら、幼稚園の園長、理事長としても手腕を発揮したほか、鹿児島教区

肉のわざと霊の実り

聖霊による洗礼を受けて、新しい神の民とされた教会では、新しい表現で、律法と福音の教えを説いています。ガラテアの信徒への手紙にそれを垣間見ることができます。少しその背景について説明します。

聖霊降臨後、イエスの弟子たちが宣教活動を始めますが、弟子たちは皆ユダヤ人で、その対象もユダヤ人でした。

彼らは律法のことには熟知しているのに、洗礼の掟も知っていました。それで、洗礼の前に割礼を受けるべきか否かについて議論していました。ペトロ以下、ガラテヤでイエスから召命を受けた弟子たちは、洗礼前の割礼の執行に賛成でした。しかし、これに猛烈に反対したのが、嘗てはユダヤ教の教師でしたが復活したイエスに出会ってから、

の会計担当、修道女連盟や看護協会の顧問司祭を務めるなどした。

自身の召命と鹿児島教区に派遣された田原神父は「幼い頃、地元の教会の司教館で主任神父からカステラを食べさせてもらった。それが美味しくて、美味しくて。神父になるとこんなものが食べられるようになるのかと憧れた。私にカステラを食べさせてくれた神父は、鹿児島島の宣教に尽力した島田喜蔵神父だった」と司教叙階50年の折りに語ってくれた。いつも飄々とした感じの神父だったが、鹿児島に赴任してきた1年後に家族がブラジルへと移住したため、「身内がいなくなった鹿兒島での生活によって、外国から派遣された司

改宗したパウロでした。激論の末、結局パウロの主張が受け入れられ、ユダヤ教から完全に決別したキリスト教が誕生したのでした。その結果、イスラエル民族のための律法から、全人類のための福音へと変貌するために、肉のわざと霊の実りで新しい律法が説明されたのだと理解することができると。具体的には以下の通りです。

「肉の業は明らかです。それは、姦淫、わいせつ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、ねたみ、泥酔、酒宴、その他このたぐいのものです、(中略)これに対して、霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です。これらを禁じる掟はありません。」(ガラテアの信徒への手紙5・19、23) 良い四旬節お過ごしください。

恐れるな、私はあなたを助ける

キリスト教一致祈禱会での澤ヤエ子修道女のメッセージ

あなたと共にいる

私たちは昨日（1月18日）から「キリスト教一致祈禱週間」が始まったため、本日、信仰の一致を願ってザビエル教会に集まってきました。これは1月25日土曜日の「使徒聖パウロの回心の祝日」に終わります。

キリスト教共同体は100年以上にわたり、この貴重な霊的行事にかかわって来ました。

それはヨハネ福音書の「すべての人を一つにしてください」（17章21節）というキリストのみ心に従って、洗礼を受けたすべての人の一致のために祈る時だからです。

キリストの名は交わりと一致を作り出すものであって、分裂させるものではありません。

キリストが来られたのは、私たちの間に交わりを作るためであって、仲たがいをさせるためではありません。

洗礼と十字架は私たちが共有するキリストの弟子の中心的な要素です。信仰の原点に立ち返り、福音の喜びと平和への道を一緒に歩むのうちに歩んでまいりましょう。

今お聞きになった聖書のことばに「あなた方に、平和があるように」とありました。現実の世界に目を向けてみますと平和は見えませんが、私たちが一人ひとりの心の平和から世界の平和は始まると思います。一人ひとりの平和な心を大切にこ

の新しい年を生きて行きましよう。

ロシアがウクライナに侵攻して3年が経とうとしています。そのうちにガザとイスラエル、他の国々での内戦・内乱によって、大勢の大切な命が失われておられます。この戦争を1日も早く終わらせ、世界に平和が訪れますようにと願いながら、たくさんの方々が祈りの集いを続けています。

一例ですが、諸宗教の方々と毎月1回、「沈黙の祈りの行進」をしておりま

す。ザビエル教会の聖堂で各自の宗教の仕方によって祈ってから出発し、天文館のアーケード内を祈りながら歩き、西本願寺の本堂でザビエル教会のものと同じように祈りをささげ、照国神社へ。そこでも祈りをささげてザビエル教会に戻ってきてお互いに分かち合っています。

もう一つは、私たちレデンプション宣教修道女会の唐湊にある修道院の聖堂で、月に一度集まり「世界平和のため・ウクライナに想いを寄せて」の祈りの集いです。毎回20〜30人の方々が駆けつけてくださいます。そして出席できない方々はそれぞれの場で私たちに心を合わせて祈ってください。

私たちのこの鹿兒島で実施されている二つの祈りの集いと大勢の方々からの支援金などは、戦時下に置かれていたウクライナの人々から大変喜ばれ、「同じキ

リスト者として、また同じ神さまの子どもとしての連帯を感じる」と感謝されています。

そしてウクライナで支援活動が続いている私たちの修道会の姉妹たちから、感謝の言葉が届けられています。

教皇フランシスコは「私たちの武器は祈りです」と言われています。私たちはこの祈りを通してウクライナの人々、その他の内戦・内乱に苦しんでいる国々の方々と連帯して生きてまいりましょう。「互いの違いを認め合って生きる方法を学ぶこと」によって、平和の

証人にならなければなりません」とも教皇フランシスコは言われています。今日のキリスト教一致祈禱会のテーマ「このことを信じますか」というイエスの

交流のひとつ

司祭大会終わる

恒例の鹿兒島教区司祭大会が1月20日（月）と21日（火）の2日間、鹿兒島市で開催された。

初日の懇親会と2日目の会議とミサという今年の大いに出席したのは、中野裕明司教、郡山健次郎名譽司教と教区司祭12人、修道会司祭8人、助祭5人の合計27人（内オンラインでの出席4人）だった。

大会初日に鹿兒島市与次郎の「サンロイヤルホテ

のことばを心に留めて、お互いを理解し合い、認め合いながら、神さまが望んでおられる教会の一致と世界平和を日々祈り求めて歩んでまいりましよう。

ル」であった懇親会は、交流と情報交換のひとつとなったほか、ビンゴゲームで豪華景品を獲得し笑顔になる司祭たちの顔が見られた。2日目は教区本部を会場に午前10時から会議（コンベンツス）が開かれた。

会議では、2025年度の年間行事予定の確認に続いて、この春に献堂50周年を迎える種子島教会の主任司祭鈴木康由神父から記念の年に手掛けたという「種子島・屋久島教会の修繕」について、その内容と協力要請、返礼品、また記念誌についての説明が

あった。鈴木神父によると塩害のために傷んだ種子島・屋久島教会で建物や空調設備の修繕にかかる費用は約700万円。小教区だけの力ではこれだけの費用の捻出が困難なため、他小教区単位の協力を願いたいとのことだった。

またこの日の会議では始まった「聖年」についての取り組みについての説明があった。教区本部によると聖年開始ミサで記念のカードが配布されたこと、また聖年についての解説、聖年の祈り、聖年の免償とそれ

キリストの名によって一致へ

今年のキリスト教一致祈禱会

毎年恒例のキリスト教一致祈禱会が1月19日（日）午後、ザビエル教会であった。分裂の歴史を持つキリストを信じる兄弟姉妹たちの一致を願って祈り合うこの集い、今年もカトリック教会の担当で午後3時から

霧島彬神父の司式で始められた。ザビエル教会には約40人のカトリック、プロテスタントの信者が駆けつけ、熱心に祈りをささげた。テーマは「あなたは、このことを信じますか」。

霧島神父によるヨハネ福音書朗読後には、レデンプション宣教修道女会の澤ヤエ子修道女が「キリストの名は一致を生み出すものであって、分裂させるものではない」とウクライナとロシア、イスラエルとガザの紛争を例にあげ、理解し合うことの大切をメッセージとして伝えた。「恐れるな、私はあなたを助ける」

その後は、復活のローソクに火が灯され、全員で使



を受け取るための条件、ゆるしの秘跡の式次第などを掲載した鹿兒島教区独自の「聖年のしおり」を作成したことが報告された。この「聖年のしおり」については、印刷製本したものを配布する予定だったが、各小教区で各々が使いやすく処理したいとのこと、印刷製本は行わず教会、修道院にそのデータを配布することになった。聖年に関するは、若者のローマ巡礼が紹介され、鹿兒島からも若者を送り出したい旨が伝えられ、またその費用捻出への協力が願われた。

その後のミサでの説教で中野司教は、「教皇が流動的と表現する複雑に変化する現代世界にあって大切なのは自分たちがどこに帰属しているのかをしっかりと認識することだ。私たちは神に帰属している。私たちは神の根っこは神にある」と強調し、「洗礼を受けたことのアイデンティティーを自覚し、それをもとに政治や社会を考えよう。これが聖年の歩みになると思う」と司祭たちに熱いメッセージを送った。

CÓ MỘT NGƯỜI HIỂU MINH

Có bao giờ bạn thấy mệt mỏi khi phải giải thích lòng mình?

Có bao giờ giữa những cuộc trò chuyện rộn ràng, bạn chợt nhận ra chẳng ai thực sự lắng nghe?

Có bao giờ bạn ước mơ, chỉ cần im lặng mà người đối diện vẫn hiểu hết mọi điều chưa nói?

Chúng ta đi qua cuộc đời với những mong cầu giản đơn: được yêu thương, được lắng nghe, và được thấu hiểu. Nhưng rồi, càng lớn lên, càng trải qua nhiều mối quan hệ. Ta mới nhận ra, để tìm được một người hiểu mình, không phải là chuyện dễ dàng. Và chỉ có Giê-su mới có thể làm được điều đó trong cuộc đời tôi.

Chúa hiểu tôi, nhưng không có nghĩa là Ngài luôn đồng ý với tôi, nhưng lúc nào cũng bên cạnh tôi mỗi khi tôi cần. Chúa có thể chẳng nói nhiều, chẳng hứa hẹn điều gì lớn lao, nhưng sự hiện diện của Ngài đủ khiến lòng tôi lặng lại. Như một cơn gió mát giữa ngày oi ả, như chiếc gương trong phản ánh đúng hình dáng của ta, không méo mó, không phán xét.

Chúa là người hiểu mình, là khi ta không cần phải chọn từ ngữ thật cẩn trọng, không phải giấu đi những khuyết điểm, những nỗi buồn nhỏ nhất, Ngài không hỏi ta “Tại sao lại buồn?”, vì Chúa biết đôi khi nỗi buồn chẳng cần lý do. Người không bảo tôi: “Phải mạnh mẽ lên”, vì Ngài hiểu có những lúc yếu đuối cũng là một phần của con người.

Suốt một chặng đường dài, Người đã đồng hành với tôi như thế. Ngoại trừ Thiên Chúa: “Liệu có ai trên đời này thực sự hiểu mình?” Tôi có thể soi chiếu lòng mình qua ánh mắt người khác, kỹ vọng họ chạm đến những vết thương mà tôi còn chưa dám đối diện. Thế nhưng, người chữa lành chỉ có Chúa mới có thể làm được.

Cuộc sống đôi khi không phải là hành trình tìm kiếm ai đó để lắng nghe mình, mà là học cách lắng nghe chính mình trước. Khi ta đủ tĩnh lặng để hiểu những mong cầu, tôn trọng, và cả những niềm vui giản dị của bản thân, ta sẽ không còn cảm thấy đơn độc giữa thế giới rộng lớn này, bởi vì ta có Chúa. Bởi đôi khi, điều quý giá nhất không phải là có người lắng nghe mọi điều ta nói, mà là có Chúa hiểu cả những điều ta chưa từng thốt ra.

Sr. Marie-Daria DO THIEN THANH

若者の召命のために祈る

教区修道女連盟が奉獻生活者と共にささげるミサ

2月1日(土)午後、鹿兒島カテドラル・ザビエル教会で教区修道女連盟主催の「奉獻生活者と共にささげるミサ」があった。午後2時から始められたミサには、30人あまりの修道女が参列し、中野裕明司教と修道女連盟顧問司教の小隈憲士神父(ザビエル教会主任司祭)が司式するミサで奉獻生活を送ることのできる恵みに感謝し、また修道者



への道を歩む若者が増えるよう祈りをささげた。一般の信徒たちの数は10人ほどだった。

この日のミサは、翌日の典礼(主の奉獻)が用いられ、小隈神父によるルカ福音書の朗読後に中野司教が説教した。

中野司教は昨年10月24日に発表された教皇フランシスコのイエスのみ心の信心に関する回勅「ディレクシット・ノス」を取り上げ、「18世紀頃に始まったイエスのみ心に関する信心業を今一度新しい視点で見直してみよう」と訴えた。

中野司教は、教皇はこれまで分断とか変革という言葉で表現されてきた現代社会を流動的で液体に例えられる社会だと解説。そして「理性と感性の調和で成り立つべき人間の心で、今、感性(精神性)が袋小路に入っており、コミュニケーション

ションが取りづらくなっている。私たちが信じるイエスの心は、まことの神とまことの人間の心が調和されている。今こそイエスのみ心でこの流動的な社会において正しい判断を下してほしい。奉獻生活を送ることは、限界ある肉体の中に無限の愛があることの証。す

べてを差し出して生きる奉獻は、神が自ら下りてきてくださったアガペーの愛。奉獻生活者にはそのアガペーの愛を幼稚園や学校、教会など社会の中で皆に示してほしい」と訴えた。

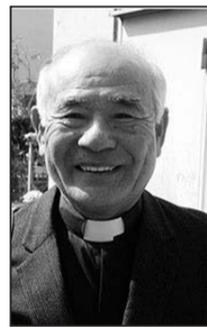
その後の共同祈願では、修道者として生きる道を歩

川口茂終身助祭帰天

鹿兒島教区の終身助祭・使徒ヨハネ川口茂さんが2月14日(金)午前9時ごろ、南九州市の自宅で帰天された。81歳だった。

川口助祭は1943年10月10日大阪府に誕生し、永年団体職員として働き、退職した後、2011年3月6日にザビエル教会で助祭に叙階された。

叙階後は、所属していた



青年のための四旬節黙想会

日時: 3月23日(日) 14時~18時
場所: マリア山荘
参加費: 無料(申込み不要)
問合先: 貴島丈弥神父(紫原教会)
李 秉徳神父(鴨池教会)
※黙想会後には共に夕食のひととき。

イグナチオの霊操(2)

紫原教会主任司祭 貴島丈弥

霊の識別(3)

悪い霊の手段
先月は、霊の識別においての悪い霊のはたらきを見ていきました。今回は、その逆のはたらきをする悪い霊である敵の声について見ていきます。悪霊は、5つの方法で人間を攻撃するとされています。それらは次のとおりです。

- ①誘惑(Temptation)
- ②寄生(Infestation)
- ③強迫観念(Obsession)
- ④心痛(Vexation)
- ⑤所有(Possession)

「寄生」とは、悪霊が場所、家、もの、動物に住み着くことで、説明のつかない物音が聞こえたり、物体の出現や移動を目撃したり、その他、音楽や奇妙な音、光の放射、臭い、見えないものに反応する動物、影、シルエット、顔を見たリといった方法によって人間を攻撃することです。

「強迫観念」では、人間の知性のはたらきや自由意志を妨げることはなく、ある考えや脅迫観念を想像力や記憶の中に植えつ

ける攻撃で、被害者はそれらを追い払うことができません。そして、その思い、観念は精神や魂に深く刻まれ、終いには自分自身の観念であると思いつくようになります。

「心痛」では、悪霊が直接、切りつけたり、燃やしたり、ひつかいたり、針で刺すといった身体的な攻撃をします。また、原因不明で治療方法不明の病気を引き起こしたり、説明のつかない、職場での人間関係や親しい間柄での関係のもつれを引き起こしたりといったケースもあるそうです。

聖ヴィアンネ神父や聖ピオ神父などが受けていた攻

撃もこれに当てはまると思っています。

そして「所有」されると、悪霊はその人をのっとることができ、自己決定の機能を支配し、完全にコントロールすることができま

す。残忍で暴力的になり、人格分裂とは異なり、特徴として、ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語などといったその人が知らないはずの言語を流暢に話し、理解したり、年齢や体つき以上の力を出したり、未来予知をしたり、人の罪など、知られていない出来事や秘密を言い当てたりもします。

この「所有」された者に

対してだけ、正式な悪魔祓いが必要になります。

悪魔祓いは、カトリック教会では、司教から許可された司祭だけが、儀式書に則って公式に執り行うことができます。それ以外の時の祈りを「解放の祈り」と言い、司祭以外でも執り行うことができます。

「霊の識別」において識別されないといけないのは「誘惑」ですが、霊操中には「強迫観念」に襲われることもあります。

参考文献

Linee guida per il ministero dell'esorcismo, Associazione internazionale esorcisti, 2020

会と催し 3月

- 2日(日) 年間第8主日
- 5日(水) 灰の水曜日(大斎・小斎)
- 4旬節愛の献金(四旬節中)
- 田邊 徹神父命日(2018年)
- 6日(木) 石神秀人助祭叙階記念(2011年)
- 8日(土) 青年会・教区本部2階会議室・18時
- 9日(日) 四旬節第1主日
- 古田町教会堅信式・10時
- 12日(水) 中野アカデミー・教区本部・13時30分
- 16日(日) 四旬節第2主日
- 大熊教会堅信式・9時30分
- 17日(月) 日本の信徒発見の聖母
- 19日(水) 聖ヨセフ
- 中野アカデミー・教区本部・13時30分
- サンタマリア・ジュセッペ神父、栃尾泰英神父、グエン・ホグ・ナム神父霊名(聖ヨゼフ)
- 20日(木) ゼローム神父命日(2003年)、牧山田一神父命日(2018年)
- 郡山健次郎名譽司教叙階記念(1972年)
- 20日(木) 永山幸弘神父(1968年)、寝占敦之神父(1983年)、宋診旭(ソンジンウク)神父、鄭法鍾(チョンポプチョン)神父叙階記念(2013年)
- 21日(金) 性虐待被害者のための祈りと償いの日
- 小隈憲士神父(1988年)、末吉卓也神父、石田望神父(2003年)、池上利男助祭叙階記念(2018年)
- 22日(土) 山浦義春神父叙階記念(2003年)
- 池上聖行助祭命日(2022年)
- 23日(日) 四旬節第3主日
- 種子島教会献堂50年ミサ・10時
- 24日(月) 青年四旬節黙想会・マリア山荘・14時
- 山口好信神父叙階記念(1991年)
- 25日(火) 神のお告げ
- 泉浩二神父叙階記念(1993年)
- 26日(水) 中野アカデミー・教区本部・13時30分
- 27日(木) 島田喜蔵神父(1948年)、コンタリーニ神父(1998年)、ピンセント神父命日(2021年)
- 28日(金) 明松尊吉神父命日(1992年)
- 29日(土) 内野洋平神父叙階記念(2003年)
- 美島春雄神父命日(2016年)
- 30日(日) 四旬節第4主日
- 31日(月) 河野純徳神父命日(1989年)
- 【司教日程】5月6日常任司教委員会(東京)、8日善き牧者会、9日古田町教会、12日中野アカデミー、16日大熊教会、18日愛の聖母園、19日中野アカデミー、23日種子島教会、26日中野アカデミー、29日加世田聖母幼稚園
- 【祈りの意向】
- 教皇 危機に瀕する家族
- 日本の教会 性虐待被害者

夜空に結ばれた星座のよう

神様に見守られる食卓」とそ子ども食堂」

初めて参加した感想

「Twinkle, twinkle, little star, how I wonder what you are」

司教館の広間に、子どもたちの歌声が響いた。

2024年12月21日土曜日、「とそ子ども食堂」でのささやかなコンサート。この日のために練習を重ねてきたという英語の歌の「夜空の星を何度見上げても、心に湧き上がる不思議な気持ち」という歌詞の意味を初めて深く味わう、という体験をした。

コロナ禍では、ドライブスルー形式の弁当配布を余儀なくされた「とそ子ども食堂」が、本来のバイキング形式に戻ったと聞いていた。今日初めて足を踏み入れた。そこで見たものは、想像を超える風景だった。食事を楽しむ人、食べ終わって帰る人、席を離

れはしゃぐ子どもたち、一息つくお母さん、作業着姿のお父さんと小さな息子、若い夫婦、単身で参加している男性…

この場所を一步離れれば、つながることもないであろう人たちが、まるで、大きな家族のように見えたのである。まるで普段から一緒にいるかのように…

所狭しと、並んだ食卓に集ったどの顔を見ても、まるで居心地の悪さを感じられない。この途方もない「リラククス感」は、どこからくるのであろう。

全国で「子ども食堂」が続々と生まれ、その存在意義が人々に認知されてきている。温かいご飯をおなかいっぱい



四旬節中「愛の献金」にご協力を

教皇は毎年、四旬節に向けてメッセージを発表し、キリストを信じるすべての人が四旬節の精神をよく理解して、回心と愛のわざに励むよう呼びかけます。この呼びかけにこたえて日本のカトリック教会は、虐げられ、差別され、見捨てられ、いのちの危機にさらされている人たちの共感を大切に一人ひとりに訴えとともに、四旬節中の「愛の献金」を奨励しています。

この「愛の献金」は、カリタスジャパンを通して海外諸国と日本各地に送られ、難民や孤児、そして、貧困、失業、飢餓などに苦しむ多くの人のいのちを守るために、また彼らの自立を助けるために使われます。

食を食べること、それを人々と分かち合うこと。そこから生まれる「生きる力」に目を向けることは、現代の我々にとって、必要なことなのだ。

だがここには、他の「子ども食堂」にはないものがある。その在処を探して、お客さんの反対側にいる人々に目を向ける。

食材の調達、事前の仕込み、当日も朝早くから休みなく調理し作業する人々がそこにいた。

この日食堂に集う「大家族」を支える人々。「彼らもまた、人智を超えた大きな力

な力で支えられているのかも知れない」と気づかされた。「我々はバラバラで、互いから遠く隔たった小さな星に過ぎない。だが星々をつなぎ、星座として見いだ

すことのできる神様がいつでも夜空全体を見守って下さる。」

そのことに、思いがけず気づくことの出来た、クリスマス前の1日であった。（匿名希望）

ソウル大司教区殉教者顕揚委員会来歴

中野司教にインタビュー

去る1月21日（火）午後3時、ソウル大司教区殉教者顕揚委員会のメンバー4人が教区本部にて中野司教を訪問しインタビューを実施した。これは同委員会の発行する「The Pilgrims」誌内の企画として、アジア各地の司教へのインタビューの一環として行われたものである。この内容は本年5月に発行される同誌内に掲載されるが、別に撮影さ

れる司教メッセージが同委員会ユーチューブチャンネル上でも公開される予定となっている。インタビューの後は中野司教が一行をザビエル公園に案内した。翌日以降、一行は奄美に移動し、郡山司教や林昶奎（パク・チャンキョ）神父にも同様にインタビューを行った。（写真・中野司教、小宿教会の林昶奎神父、司教右



隣は同委員会副委員長のウォン・ジョンヒョン神父

「短信」

▼奄美で合同クリスマス
昨年12月14日（土）に、古田町（マリア）教会聖堂と隣接するゼローム館を会場に子どもたちのための「奄美地区合同クリスマス

会」を開きました。参加予定は子ども22人、スタッフ6人、シスター10人、大人6人でしたが、実際には申し込みなしで参加した子、欠席した子どももいて子ども（幼稚園児から中学校3年生まで）23人、スタッフ6人、シスター12人、大人7人の総勢48人となりました。聖堂でキャンセルルームに移した後、ゼローム館に会場を移して宝探し、歌遊び、折り紙遊び、〇×クイズ、ビンゴゲームなどに楽しみました。今回もイエスのカリタス修道女会のシスター方ははじめ聖心教会の信徒、古田町教会の教会学校のスタッフなど、多くの信者さんたちの支えによってイエスの誕生を喜びのうちに過ごすことができました。（報告・スタッフ）

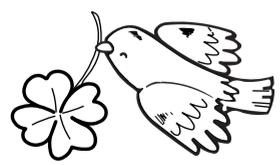


要理

ある雨の日に飛行機に乗ったときのことです。

の光が差し込まないことがあるのではないかとこのことでは、その雲は涙が出るような悲しみの雨雲、怒りに満ちた雷雲、そして他者に対する無関心という雪雲かもしれません。また、私たちが誰かの心に雲をかける

しつこくしてくれませんか。もちろん急に心が晴れ晴れするところとはありませんが、ほんのわずかなでも雲と雲の間に



神様からの光をさえぎるもの

てしまっているかもしれません。

忘れたがちなこと、ど

いずれにしても私たちの心の中にこ

んなときにも神様やイエス様は私たちの思いを遥かに越えて大きな愛の光を私たちに注いでくださっているという

うした雲がかかってしまったときには、その思いを受け入れて自分の気持ちを祈りに託してみよう。きっと雲が風で流れていくように、祈りを通じて聖霊がそっと心にかかった雲を流

れるかも知れません。遮っているのは私たち自身なのです。